

右岸林鉄上よりみたバイパス出口開水路
(上方の橋は完成した六段橋)

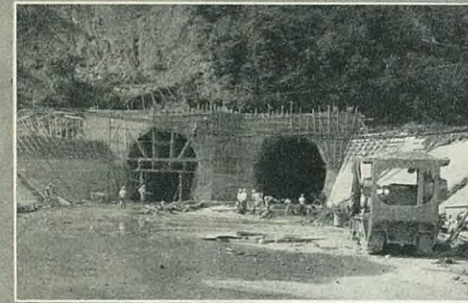
突貫作業に終始した バイパス工事

このバイパス工事は昨年12月着工以来、文字どおり昼夜兼行の突貫作業で進められてきた。着工そのものが補償問題の難航や着工認可の渋滞などで遅れた上、工事中にも坑内のガス発生や落盤事故で、貴重な時間を手待ちさせられた。あとに続く締切工事を考えると、バイパスの完成はいくら早くても早過ぎるということはないのであるが、ともかく240日ぶりで2本のバイパスはみごとに完成した。第1線の公団監督員も「昼夜3交代の勤務を一月続けるとさすがに寿命が縮まった」と8カ月間の苦しい努力を述懐している。心からご苦労さを申し上げたい。

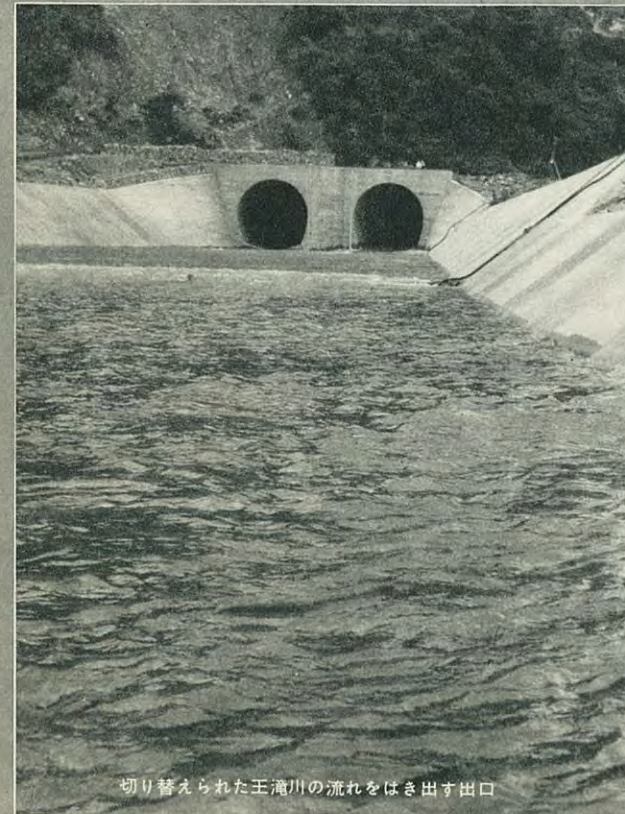
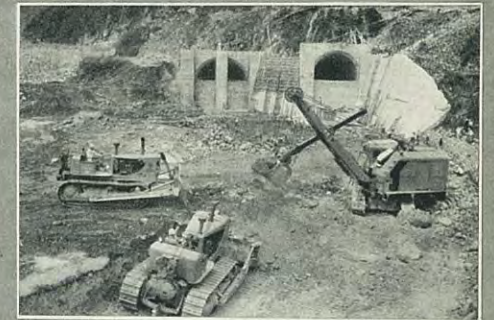


玉滝川の流れをのみこむ入口

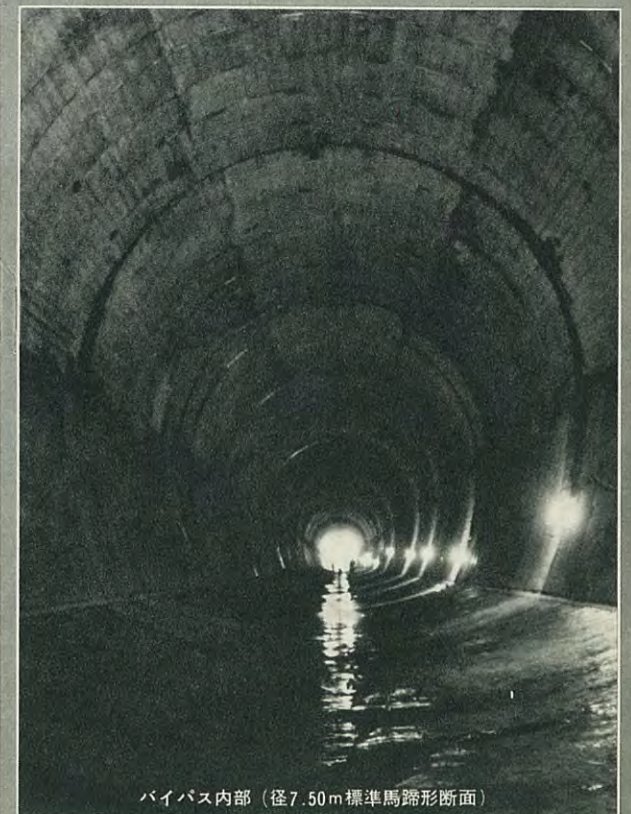
工事中の入口



工事中の出口

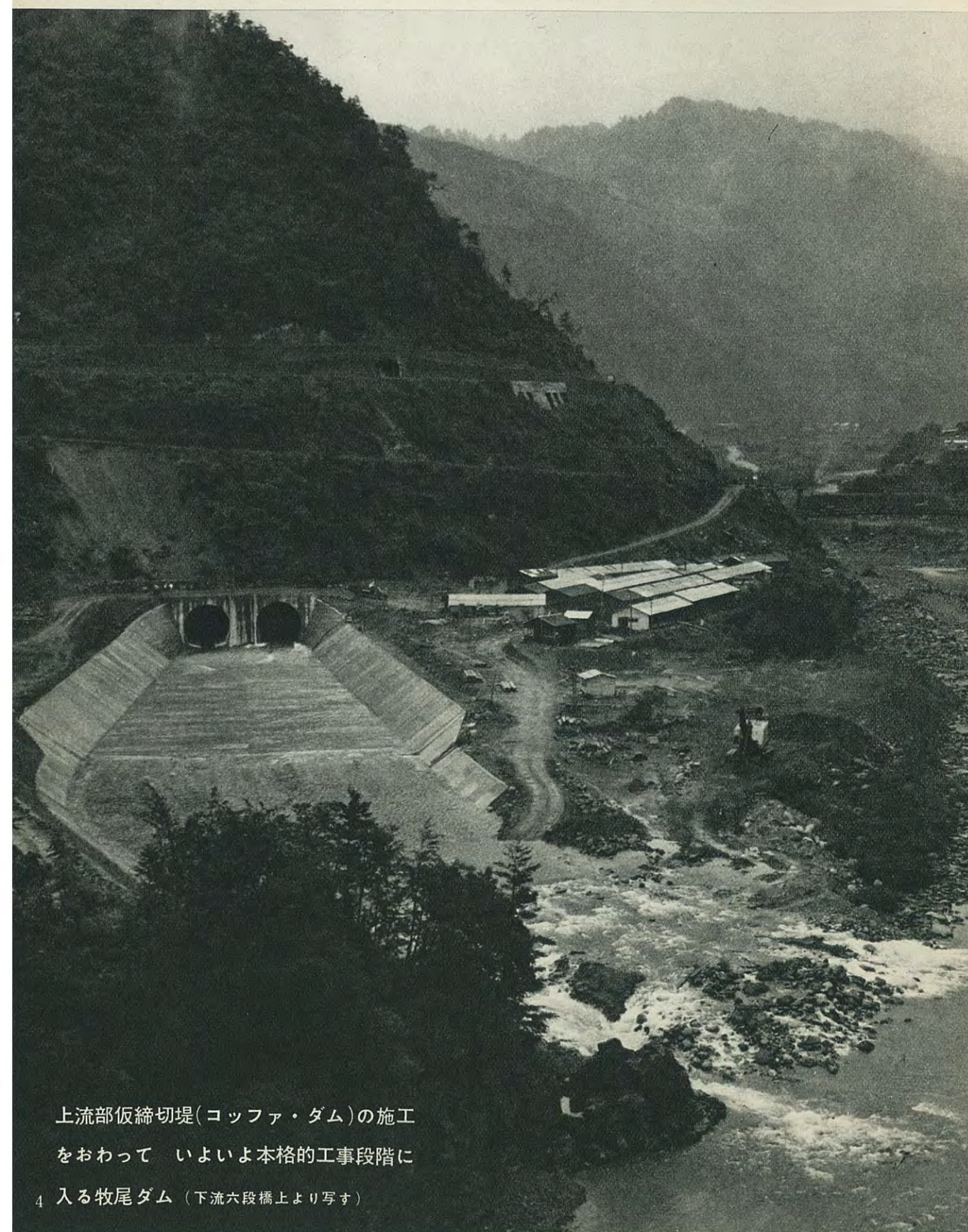


切り替えられた玉滝川の流れをはき出す出口



バイパス内部 (径7.50m標準馬蹄形断面)

牧尾ダム 本体工事いよいよ着手



上流部仮締切堤(コッフア・ダム)の施工
をおわって いよいよ本格的工事段階に

4 入る牧尾ダム(下流六段橋上より写す)



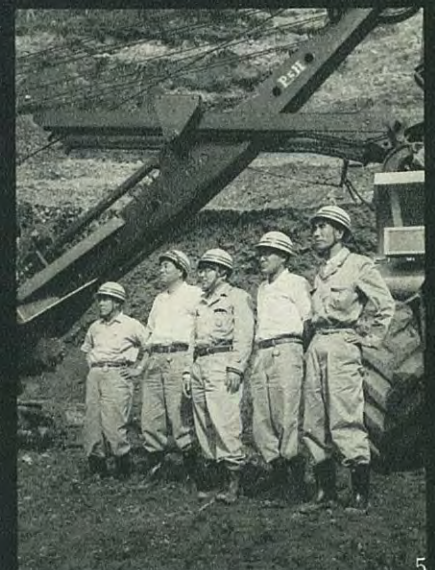
公団技術陣の 真価を決定する 牧尾ダム施工

牧尾ダム本体工事はさる5月初め、バイパスを施工した西松建設との間に契約が成立した。同社では直ちに1200人の労務者を現場に送り込み、一方15トンから25トンという超ど級の重機械群も続々到着して、万全の現場態勢は着々ととのえられた。

23億余という工費もさることながら、堤体積**254万 m^3** の大ロックフィルダムをわずか**3年**で完成させようという画期的な工事計画は、むしろ本邦農業土木始まって以来の大工事である。

それだけに技術的な難問題も少くないのであるが、しかし、いずれにしても公団技術陣の真価は、この牧尾ダムによって決定づけられるとわいていである。すでに、この責任ある課題の解明に向けて、公団技術陣はその第1歩を踏み切ったのである。

ダム現場第1線に日夜健闘する右から、
原田堰堤担当理事、高嶺工事課長、内藤次長、瀬戸事業所長、山口庶務課長



王滝川締切の記

—7月23日—

□川は生きている

一体、ダム建設のための河川の締切工事は、ダム工事の全体からみれば、局部的な準備作業の一つに過ぎないといえる。しかし、川はまさに生きているのだ。したがって、いつでも自由勝手に締切られるというものではない。特に日本の河川は、流れが急で雨量の変化に敏感だから、締切時期の決定はむずかしくなる。「いつ締切るか？」——まずこれを決定するために、技術の最高責任者は深刻に頭を悩ませる。

□いつ締切るか？

「熟慮断行」という言葉は、まこと河川締切のためにあるといていい。締切の時期は、河川の流量と締切前後の気象状況を慎重に考慮洞察した上で決定される。王滝川の場合は、過去の統計から推して、渇水期である10月半ばから翌春融雪前までを最安全時期とする。次は梅雨明けから8月の半ば頃まで。第1の時期に決行できれば問題はない。しかし牧尾ダムの場合は、前述したような理由からバイパス完成が遅れたため、残念ながら間に合わなかった。もし技術的安全だけを第一義に考えるのなら、10月まで締切は延ばすべきであるのかも知れない。だがダム工事のスケジュールは、いまや1日を争う段階にきている。それに7月20日前後の王滝川の流量は30トン、「やるなら今だ」技術者なら誰もこう考えるに違いない。しかし——おそれていた不可測・不可抗の自然の脅威がすでに迫りつつあったのである。

□接近する台風11号

私たち日本人にとって、台風は全く歓迎されざる“季節の

訪問客”だ。初期段階のダム工事にとっても、もちろんこれほど苦手の敵はない。このころ、太平洋上を気まぐれに散歩しながら、本土に近づきつつあったのが11号台風である。相次いで発せられる台風警報。公団本部の桜井理事以下技術首脳は、台風接近の緊急情報を前にして苦慮を続けた。しかし、22日夜ついに東海地方は台風圏内に入った。23日の締切は一応見送ろう——ようやくこの決定がなされたのは22日も深夜であった。

□台風回避——締切決行

22日夜まではこのように緊迫した気象状況であったが、23日が明けると事態はガラリと急変した。午前9時発表の気象特報は、「御前崎に上陸した台風は東京北方にあり、その余波も完全に回避された」というのである。そして週間予報も「当分の間グズついた天候だが大雨はない模様」という。これによって即座に決行の断が下された。にわかに活気づく現場、しかも木曾谷の上空はその頃から暗雲を吹き払って、奇蹟のような快晴に変わりつつあった。

午前11時5分、瀬戸所長の右手が高く上る、と同時に満を持していた33台の重機械群が一せいに活動を開始、戦場のようなすさまじい轟音が木曾谷を埋め、対岸に並んだ黒山の人垣がカタズをのむ。“王滝川の歴史がいま変わりつつある。——力強い重機械群の活動をみていると、この感じがいかにもピタリとくる。11時35分、意外に早く荒締切完了、続いて本締切に移る。

そして再び昼夜兼行でコッファ・ダム(締切堤)の築堤が、その態勢のままで力強く推し進められてゆくはずであった…。



連日の突貫作業でオペレーターも疲れ切っている。締切開始までのしばしの時間をまどろむ(注:非演出)



重機械の轟音が木曾谷の
天地をゆるがすうちに王
滝川は締切られてゆく